智証大師とその肖像彫刻

1

智証大師円珍は第五世の天台座主で、園城寺の開祖であったことは人の広く知るところである。智証大師の伝記は三善清行(きよつら)が撰した『比叡山延暦寺座主円珍和尚伝』や、尊通撰の『智証大師年譜』などがあり、ある程度詳細なことがわかる。とくに『比叡山延暦寺座主円珍和尚伝』は、大師が歿した寛平3年(891)から遅れること11年後の延喜2年(902)に、大師の直弟子たちが伝記の大略を筆記したそれを翰林学士三善清行が文章化したもので、その記述には信頼性がある。

これらより智証大師を説べると、大師は讃岐国(香川県)那珂郡金倉郷の人で、父は和気宅成、母は弘法大師空海の姪であった。15才のとき叔父の僧仁徳につれられて比叡山に登り、義眞(初代の天台座主で最澄とともに入唐した)の門弟となった。仁寿元年(851)38才、入唐のため比叡山を出て太宰府につき、同3年7月九州をあとにして中国に渡った。中国に滞在すること5年、その間大師の中国における求法業績を裏付けるその頃の史料が多く園城寺にいまも残されていて、この史料は単にわが国の宝だけでなく、九世紀の世界的な貴重史料である。一般の人々が興味をひかれるものでは大師が使用したパスポートであるとか、中国の関所を通るときの許可書まで伝存している。また中国から持ち帰った重要な聖教類もあり、その目録も現存している。

慈覚大師円仁につづいての智証大師入唐は、比叡山の教学を不動の体制に確立した。伝教大師最澄にはじまった比叡山は、この両大師によって磐石の位置付けを築くこととなったのである。智証大師の中国巡礼次第は、石山寺に伝える大師の中国旅行記の一部である『行歴抄』や、大師が請来した史料によってよく知ることができる。

大師は帰国すると園城寺をおこして園城寺を天台別院とした。康平5年(1062)藤原実範が記した『園城寺竜花会縁記』には大師が入唐求法の帰途、新羅明神が大師の船に現われて、大師のために仏法の護持を約束して姿を消した。大師帰国後再び明神は姿を現わして、仏法の道場として勝地である今の園城寺の位置を指示したので、大師は明神の託宣によって園城寺をおこしたと記している。この新羅明神託宣説話は『園城寺竜花会縁記』に始めて出てくるもので、三善清行撰の『円珍伝』

智証大師坐像(園城寺勧学院所在)

には貞観５年(863) 大師は園城寺にて両部の大法を宗叡に授けたと記しているだけでこの説話は全く見當らず、十一世紀ごろに生まれてきた説話であろう。

大師は中国から請来した聖教類を比叡山東塔西谷の山王院のほとりに後唐院と呼ばれる山坊をいとなみ、ここに収めて子弟の育成に務めた。大師の門流からはそののち比叡山の中心をなす学僧がつぎつぎと多く生みだされ、十世紀中頃すぎに慈覚大師門流の慈恵大師良源（元三大師）が出るまで、智証門流は天台教学の中心的存在であった。大師は貞観10年(868) に安恵座主のあとを嗣いで第五世の天台座主となり、寛平３年(891) 10月年78才で歿するまでその治山は23年の永きに及んだ。

2

園城寺唐院の大師堂には中央に智証大師像、その向かって左に御骨大師像、右に黄不動尊像の三軀の彫像が安置されている。御骨大師像とは、大師の砕骨を納めた智証大師像である。智証大師像・御骨大師像の由来は『園城寺堂社便覧』・『寺門伝記補録』に詳しく記されている。それによると寛平３年２月大師は門人に滅後わが像をつくり、骨をその中に蔵し、唐坊に安置せよとの言葉によって、大師の歿後門人は影像二軀を作り、一を比叡山に留め、一を園城寺唐坊に安置して砕骨を納めた。いまの御骨大師はこれであると記している。

一方『寛平三年円珍御遺告』と称されるものがある。寛平３年10月28日、大師は病床にて筆をとり、門弟に十一か条にわたって訓育をたれ、高弟の増命ら数名が侍してこの遺告をうけたという。この御遺告は平安末期山門側によって偽造された可能性が強いが、その中の一条に自分の死骨をもって影像をつくり、山王院（後唐院）に安置し、御影堂とせよとある。この御遺告には御骨大師を山王院に納めるように記されてはいるが、事実は『園城寺堂社便覧』などに記されるように園城寺唐院に安置され、山王院にまつられたのは智証大師像の方である。伝教大師が歿すると遺骸は荼毘に付されて廟墓が造られたが、慈覚大師は門人に遺言して山上に廟墓を営むのは宗祖だけで、他のものは一切営んではいけない。自分の墓もただ一本の樹を植えて標識とすればよいといっている。門人はその言葉によって東塔東谷の梯尾に墓所を簡素に営んだ。

大師の御骨大師像は像内に砕骨を収めた像であるから、慈覚大師を兄弟子として尊敬する大師は、当然慈覚大師の思想は受けいれていて、自分の納骨像を比叡山上の山王院に安置するよう門人に指示するはずはない。納骨像を安置する廟墓は自分が興した園城寺にこそ設けられるべきであると考えていたに違いない。

比叡山はわが国肖像彫刻史上大きな役割をもち伝教大師・慈覚大師・智証大師の歿後それぞれの像が次々に作られて、これらはのちに仏像と同列の意義を持つようになってくる。正確な意味の肖像彫刻が現われてくるのは、奈良時代の鑑真和上像を初めとするが、そののち肖像彫刻が本格的に展開されてくるのは平安時代の始め比叡山においてである。そして作られた肖像は像主が生前に生活した住坊に安置されて、生き身の師匠に接するがように崇め、のちそれが御影堂としての信仰形態を整えることとなる。大師の歿後弟子たちは師匠の肖像を二軀つくり、一軀は大師の死骨（火葬骨）を像内に納めて園城寺に大師堂を建てて廟墓とし、他の一軀は大師生前の山上の後唐院に安置した。延長５年(927) 智証大師号宣下に際して智祐などが奉った賀表に「ここに飛竜の使、影堂を開きて徘徊す」と記され、十世紀の前半には比叡山東塔西谷の後唐院にこの智証大師像が安置されていたことが分かる。いま園城寺唐院の大師堂にこの智証大師像が御骨大師像と一緒にまつられるようになったのは、慈覚・智証両門の勢力争いの結果、智証門流の僧侶によって比叡山上の後唐院から園城寺の大師堂に移されたからである。

慈覚・智証両門は始めは智証門から高僧が次々と出てきて、座主となっていった。大師

の次の第六代座主惟首は智証門第一の門弟であったし、第七・第八代の座主も大師の直門で第九代の長意は慈覚門流であったが、第十、第十一代は共に智証門流であった。そののち中間派の時代もあったが、大師歿後七十余年は智証門繁栄時代であった。ところが第十八代座主慈恵大師良源が慈覚門流より出てから、この門流が賑わい、いままでの流れを大きく変えた。このころ一つの重大な事件がおこった。智証門の余慶が天元4年(981) 11月朝廷から法性寺座主に任ぜられたのである。法性寺は藤原忠平が創建した寺院で、代々の座主は慈覚門から任ぜられるのを通例としていたが、このとき始めて智証門の余慶が座主となった。不満を生じた慈覚一門は朝廷に強訴を行い、怒った圓融天皇は強訴者百六十余人の封職を止められた。これより両門徒の不和は日を追うごとに深くなり、智証門の人々の中には比叡山を出て大師の創めた別院園城寺による僧が多くなっていった。智証門が比叡山を退出して慈覚門から分裂し、園城寺を本據とした天台宗寺門派を主張するようになるのは、一条天皇の正暦4年(993) になってからである。この年8月智証門徒は慈覚大師の遺志によって建てられた西坂本の赤山明神を襲撃した。報復として慈覚門徒は山上の山王院及びその諸房を切払って智証門の根據を覆して門徒千余人を放逐したのである。園城寺の記録である『寺門伝記補録』には、凶徒が山中を横行しているので相謀って早くこの魔界を離れ大師伝法の道場園城寺に移ったと記し、さらに同書は山王院にまつられていた智証大師像を同（正暦4年）8月10日慶祚・賀延・中増および門徒一千人らが荷負して下山し園城寺唐院に安置したとしている。そののち智証大師像はいつ頃かわからないが御骨大師に対して「中尊大師」と呼ばれるようになり、天台寺門派の深い精神のよりどころとなって現在に至っている。

3

智証大師坐像（中尊大師）は像高85.1センチメートル、御骨大師坐像もほぼ同高で、形姿はともに近似している。風貌は三善清行の『天台宗延暦寺座主円珍伝』に「頂骨隆起して形覆坏の如し、遠くこれを視るに尖頭あるに似る」と記され、他書にも「頂骨隆起して形肉髻の如し」とあって世俗の言う所謂ビリケン頭であったことが分る。園城寺唐院安置の両像は共によくその風貌を表現していて、「円珍頭」との言葉まで生じている。中尊大師の肉身部は肉色を漆地の上に塗り、顔の眉、目、朱のくまどりをもつ瞳、緑青彩の髭のそりあとなど大師の面影をよく伝え、衲衣の襞も美しく、袈裟の条や遠山文様が他の採色とともに造立期のまま残している。手は腹前で禅定印を結び、目は瞑想のまなざしとなり、中世に入って見られる肖像彫刻の写実的な生々しさはなく、理想化された大師への思慕がこの像には窺われる。この中尊大師・御骨大師の両像こそ、比叡山の再々の火災に平安初頭の伝教大師像・慈覚大師像を失った今、わが平安前半肖像彫刻のまことに貴重な代表遺宝といえる。

大師の肖像彫刻はこの両像をもととして造立されたものが、いくつか他に現存している。園城寺勧学院の大師像や、かつて園城寺の門跡寺院であった京都市聖護院の大師像である。聖護院の大師像は背部内刳りの中に銀造小筒に納めた仏舎利一粒、如意輪心中心真言観一通、円珍入唐求法惣目録一巻、造像記一紙が納められていた。この入唐求法惣目録は巻末に大師が自筆で「この求法目録一巻を謹んで太政太閤のもとに送上し伏して来縁を結び奉る。日本天安三年歳(はし)巳卯に次(やど)る四月十八日僧円珍録上す。」とあって、大師が入唐求法した惣目録を天安3年(859) 4月藤原良房に送上したものであることを記している。

造像記には「康治二年八月十三日丁酉、仏師良成を以って御室戸において唐院の大師御真像を造写し奉らしむ。同十八日壬寅、仏舎利一粒・大師御筆入唐求法惣目録一巻・并びに如意輪心中心真言観一紙を件の真像中に籠め入れ奉らしめ畢ぬ。願くは、大師照見を垂れ護念を加え、世々生々の門弟のため同じく

共に無生忍を悟らしめよ。三井寺沙門権大僧都覚忠記す。」とある。これによると康治２年(1143)８月唐院の大師像を園城寺の覚忠が、御室戸において仏師良成に命じて模刻せしめ、像内に大師の関係品を納置したことが知られる。

覚忠は第三十二代の園城寺長吏で関白藤原忠通の子として生まれている。覚忠は藤原氏相伝の、大師が藤原良房に送上したこれらのものを生家からゆずり受けて、康治２年唐院の大師像を模刻せしめて、法舎利的な意味で像内に納めたと考えられる。この大師像は聖護院に古くからあったものではなく、京都八瀬にあった解脱寺（現在は廃寺）から移された像で、像高は85.5センチメートル、園城寺唐院大師堂の両大師像とほぼ同高で、御骨大師の模刻である。覚忠が中尊大師を模さずに御骨大師を模刻したことは、大師の関係品を法舎利として納めるための大師像造立であったから、御骨大師を模したのはそこにそれだけの意義深いものがあったと考えている。覚忠の造像記に唐院大師御真像を仏師良成をして御室戸にて造写せしめたとあるが、この康治頃ひととき園城寺唐院大師堂の大師像が京都宇治の御室戸に移されていた、その機会をとらえての造写、即ち模刻ではなかったかと思う。『百錬抄』嘉禄元年(1225)12月17日条には、天王寺別当の訴により園城寺大師御影を、覚実長吏の沙汰で一時御室戸に渡したと見えるから、この平安末期にも何かの理由があって大師像が一時御室戸に移されていたのであろう。仏師良成は『覚禅抄』に宇治仏師と称され、智足院入道の持仏堂の仏を造ったと記されている。智足院入道とは関白藤原忠実のことで覚忠の祖父にあたり、覚忠と良成は無縁でなく、しかも宇治御室戸で宇治仏師良成が御骨大師の模刻を命ぜられたのは当然のことで何の不自然もない。

園城寺勧学院の大師像は、勧学院持仏堂にまつられる像高39センチメートルの小像である。膝前を含めて一材からつくり出し、唐院の大師を基本として造立された平安後期の大師像である。像は像底から頭部に及ぶ深い円筒状の内刳りが像内に施され、地付き部が円筒状内刳り部を中心として四辺形に浅く刳って蓋板をはめ込む構造になっている。いま像内に何も残さないが、大師の遺品を納置するための大師像であった可能性が強く、聖護院大師像と同じ性格の像と考えてよいと思う。

4

以上智証大師の肖像彫刻を眺めてきたが、砕骨を納めた御骨大師であるとか、大師に関係の深いものを法舎利的なものとして像内に納める、平安時代の他の高僧像には見られない特性が智証大師像にはある。中世に入ると高僧像に像主の遺骨を納める例もあるが、早く平安初頭に御骨大師のごときものが現れるのは注目に価する。像内に遺骨を収めることは、あるいは大師が入唐中にその例を見聞してきたことに由来するのかも知れない。『園城寺堂社便覧』・『寺門伝記補録』には先に見てきたように大師の歿後門弟は大師の影像二軀を作り、一に砕骨を収めたと記してはいるが、二軀の大師像を様式的に相対比すると御骨大師の方が中尊大師より幾分古い形式をもつように考えられる。矢張り大師の歿後、大師肖像造立の最初は納骨像に始まり、その後に大師生前の後唐院に安置する大師像が造立されていくと考えねばなるまい。

稿を閉じるにあたって、大師の風貌の最も特色である頭頂の尖った頭部について、三善清行の『天台宗延暦寺座主円珍伝』は面白いことを記しているのでふれておく。頭頂の尖った頭には霊骸があって、中国ではこの霊骸を所持していると福利や智慧を得るという迷信があった。無頼の徒は霊骸のある人を見ると殺して頭骸骨をもち、自分がその霊骸を得ようとすることがしばしばであった。それで大師は在唐中到るところで中国の人々から身を固めて用心するように注意されたが、大師はこれに対して「もし宿業あらば防護何の益ぞ。もし宿業なくばそれ我を如何せん」と答えて意にも介しなかったと伝えている。

（宇野茂樹氏提供）